

界変のアルテントロピー

試し読み

著者／芳蓮蔵

SAMPLE

想実堂

目次

| | | |
|-----|---------------------|-----|
| 第一変 | 勇者《Ignorance》 | 1 |
| 第二変 | 学園《Boys and Girls》 | 66 |
| 第三変 | 青春《Fireworks》 | 120 |
| 第四変 | 対抗戦《Out of control》 | 196 |
| 第五変 | 規制官《The way I am》 | 246 |

第一変 勇者《Ignorance》

朝霧が立ち籠める中、湿った丘の土を跳ね上げ、一頭の馬蹄。伝令の手旗を掲げた早馬は緩やかな傾斜を息荒く駆け上る。そして居並ぶ騎馬隊の影の横を、颯爽と走り抜けていく。

「伝令！ 伝令！」

間もなく、カチャカチャと鎧や鞆を鳴らす隊列の先頭にまで辿り着いた兵士は、そこにいる一際大きな騎馬の前で止まると、開戦前の昂る空気に当てられて嘶く馬を「どうどう」と抑えながら下馬して、速やかに片膝を突いた。

「閣下、全軍準備整いました！」

「ご苦労」と頷き返した男は鉄鎧に身を包んだ巨軀の戦士。

さんばらの黒髪と強い鬚髭が、いかにも豪放な大丈夫を演出している。背にはその風体に見

合った、並の兵士では両手でも振るうのに難儀しそうな、分厚い双曲刀。

「正念場だぞ、ユウ。準備は良いな？」

男は野太い声で、隣に並ぶ少年騎士にそう問い掛ける。

「大丈夫だよレグノイ。もう覚悟はできてる」

応えた少年は、銀髪と澄んだ翡翠色の瞳。金で縁取られた白磁のような鎧と、腰には見事な細工の銀の剣を佩いている。

精悍さとあどけなさが同居する顔で、少年は真っ直ぐ丘の先を見つめていた。

手綱を握る彼の手が力むのを見て、巨軀の戦士レグノイがやんわりと論ずように言った。

「気負うな。ユウ、お前は勇者だ。そして勇者とは正しく最強であると知れ。もはやこの世でお前が勝てぬ相手など、どこにもおりはすまい。それがたとえ、どれほどの魔物の軍勢であろう

とも、或いは彼の竜——災厄竜ガアラムギーナ
であろうともな」

その言葉に、勇者ユウは手綱を握る力を緩め、
代わりにしっかりと力強く頷いてみせた。

「うん……僕は負けない。負ける訳にはいか
ないんだ。この世界を救うために」

決意の表情を見せる少年の脳裏には、彼がこ
の世界に來た時の記憶、そしてそこから現在に
至るまでの、長く険しい冒険の想い出が蘇って
いた。

＊

——4年前、東京。

土砂降りの雨、夜の繁華街に騒めく傘の群れ。
アスファルトに敷かれた薄い水面が、街の色彩
をゆるゆると反射する。

その煌びやかな灰色の鏡を、鮮やかな赤い
線が、波紋に行く手を阻まれながら静かに横断
していく。

遠巻きの野次馬達が携帯のカメラや好奇の目
を向ける先には、ガードレールに荒々しく車体
を擦らせて静止したトラック。

運転席には、虚ろな表情のまま固まり、雨が
躍るフロントガラスから闇を見つめるドライバ
ーの姿があった。

蛇行したタイヤ痕を辿れば、交差点の中央に
は一人の少年が無惨な姿で転がっている。赤い
流線の源泉は彼の頭部に他ならなかった。

周囲には教科書やノート、鉛細工の如くひし
やげた眼鏡——。散乱したそのどれもが、そし
て無論少年自身も、只々雨に打たれるばかりで
あった。

「事故お!? うわーすげー!!」

つつも起き上がろうとすると、

「——痛っ！」

何気無く身体を動かしただけで、全身に鋭い痛みが走った。

するとその声に反応したのか、レースの向この鼻唄が止み、声が掛けられた。

「あら、気が付いたのね？ でもまだ動かないほうがいいと思うわ」

するりと垂れ幕を抜けて姿を現したのは、淡い金色の髪をした可憐な少女。

彼女は小さな銀製の吸い飲みを手に、少年に優しく微笑んだ。

「私が見つけた時は死んでしまっているかと思つたもの。ううん、王室魔法まほう医いがいなかったら多分、本当に死んでいたところだわ。あ、ところであなた、お名前は？」

「えっ?! ええっと……」

少年は混乱し、思わず口ごもった。

少なくとも目の前の少女が日本人であるとは思えない。手の込んだ彼女のドレスも私服には見えないし、西洋風のやたらと豪華ごうしゃなこの部屋が、一体何処であるのかも分からない。

にも関わらず、少女の振る舞いは極めて自然で、彼女が話す日本語は母国語の如く流暢りゅうたうなのである。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「あ、いえ！ 大丈夫です全然。その、日本語がとてもお手だったので……」

「？ ニホン語って、なに？」

「え……？」と目を丸くする少年。

「私はトラエフ語しか話せないのだけど。頭を打ったか、混乱魔法にでも掛かっているのかしら？ ——はいこれ、気を付けて飲んでね」

少女は小首を傾げながら、吸い飲みを少年に

手渡す。

「あ、ありがとうございます……」

するとそこで、重厚な扉の向こうから男性の
声とノックの音が響いた。

「フェメ様。レンズです。失礼致します」

そう言いながら入ってきたのは、聖職者の法
衣よろしく、くるぶしまである長い藤色のロー
ブを纏った優男。洋紅色の長髪を一本に束ね、
細い銀糸の紐を額に巻いたその姿は、少年が知
る魔法使いそのものであった。

「勇者殿が目を醒ましたようですね」

男はベッドへ歩み寄ると、フェメと呼んだ少
女にお辞儀をしてから少年へと目をやった。

「おはよう、勇者殿。あれほどの重傷だったと
いうのに、随分早いお目覚めだ。流星は星霊に
遣わされた伝説の勇者だね」

「は？ いや、僕は——」

「おっと失礼したね。僕の名はレンズ・カイサ
ラム・ラ・ロッシュ。このトラエフで宰相の任
を仰せつかっている魔法使いさ」

「ま、魔法……使い？ あの、勇者って？」

「？ それは勿論、君のことさ。ああ隠さなく
てもいいよ、その銀色の髪と翡翠の瞳を見れば
子供にだって分かるから」

「ぎ、銀——!？」

言われてユウは、思わず自分の頭に手をやっ
た。無論それで髪の色が分かるうはずもなかっ
たが、手に伝わる滑らかな髪の感触には、微か
な違和感がある。

（何だこの感覚……。そういえばさつきから、
自分の身体が何か別物のような——）

またそれだけでなく、己の視界が極めて明瞭
であることにも気付く。

「あれ？ そういえば眼鏡もしてないのに、く

つきり視える」

ベッドの枠や天蓋の縁だけでなく、部屋のそこかしこの家具や調度品にはいちいち手の込んだ彫刻やら美しい絵柄が施されており、職人技であろうその細やかな意匠を、少年は裸眼のまま細部まで見て取ることができた。

そしてその調度品の中にあつた小さな置き鏡の中に、吸い飲みを手にしたまま困惑の表情を浮かべてこちらを見つめる、見知らぬ銀髪の少年を見つけた。

(これが——僕?)

そのままじつと鏡を眺めていると、レンズが訝し気な顔で口を開いた。

「眼鏡が必要なのかい?」

「え? いや必要……ないみたいです」

「だろうね。目の悪い勇者なんて聞いたことがない」

彼はそう言って苦笑すると、

「それで、肝心な勇者殿の名前をお聞かせ願えるかな?」と問う。

「そうそう、私もまだ聞いていないわ」

フェメも横から身を乗り出して、円らな瞳を少年に向けた。

彼らの好奇と期待の眼差しを一身に受け、少年はたじろぎながら恐ず恐すと応える。

「僕の名前は——」

*

「——ユウ、そろそろ出撃の時間だよ」

馬上で想い出に耽っていた勇者の背中に、決戦前とは思えぬ明るい声が投げ掛けられた。

振り返った彼のすぐ後ろには、白馬に跨ったレンズ。

裝飾帯に黒檀の杖を差した彼は、初めて出会った時と変わらぬ、いかにも魔法使い然とした姿である。

「君が感傷的になるのも解るよ、ユウ。長い旅路だったからね。でも冒険譚を語るのは後の吟遊詩人でも任せるとして、僕らは今、目の前の目的を果たすことに集中しよう」

言いながら進み出たレンズもまた、偉丈夫レグノイと同じようにユウと轡を並べる。そして更に快活な声を上げた。

「つまりちやっちゃんと敵を倒して、帰って皆で昼寝でもしようということさ！」

レンズのお気楽な様子に失笑するユウ。

彼のお陰で神妙な空気は払拭されたものの、些か気抜けするその内容をレグノイが横から軽くたしなめた。

「まったくお前という奴は。惰眠を貪ること

以外にやることは無いのか」

「そりゃ勿論」

悪びれも無く言うレンズに、レグノイは困り果てた表情で溜め息を吐く。

「やれやれ……。とは云えまあ、我々が戦いを離れて気兼ねなく寝られる世の中というのは、存外悪くもないのかもしれないな」

「そうそう解ってるじゃないか。流星は我が友レグノイだ」

ぱつと明るい笑顔を見せたレンズは杖をおもむろに引き抜く。そしてその杖を前に翳すと、途端に真面目な顔つきに切り替わり、

「霧よ、晴れよ」と一言。

直後——彼を中心に光の魔法陣が拡がり、そこから巻き上がった旋風が、丘を包む霧を瞬く間に掻き消した。

晴れ渡った空に朝陽が馴染み、そうして明ら

かになった丘の上の全容は壯観であった。

彼ら三人の騎馬の後ろには、涼風にはためく無数の軍旗。何十万という数の人間の兵とエルフやドワーフといった亜人の連合軍が、整然と並んでいた。

そして対する一方、丘を降った先に広がる平野には、しかし彼らを遥かに上回る数の恐ろしい魔物達が待ち構えていた。獣人鬼、小人鬼、蜥蜴人、巨人鬼。その数はざっと見積もっても、ユウら連合軍の十倍は下らない。

異形の軍勢は曲がりなりにも陣形と呼べなくもない隊列を組み、粗野な物ではあるが剣や盾といった装備すら整えていた。決して彼らの知能は低くなく、それ故与し易い相手ではないことが窺い知れる。

そんな大地を埋め尽くす大軍勢を見て、レンゾが呆れたように溜め息を洩らした。

「はあ、よくもまあこんなに集まったもんだね」

「臆することはなからう。こちらは精鋭揃いだ」

レグノイが意気揚々に鼻を鳴らすと、ユウも真っ直ぐ敵を見据えて頷く。

「ああ、僕らなら負けない」

するとレンゾが飄々とした顔で杖を掲げた。

「そうだね。じゃあ行こうか！」

その杖の先端に、レグノイも曲刀を引き抜いて切っ先を合わせる。

「いざ、世界の安寧のために！」

閑静な早朝の丘に、レグノイの威勢の良い声が高らかに響き渡ると、

「それと、僕の安眠のために！」とレンゾ。

その台詞に軽く失笑しかけたユウが、咳払いをして気を取り直し——スラリと抜き放った白

銀の長剣で天を突く。

「星霊の加護よ力となれ！」

忽ち丘の上に拡がる金色の魔法陣——そこからキラキラと降り散る光の粒が連合軍の兵士達に降り注ぐと、彼らの装備が光を帯びた。この魔法の光が彼らの剣をより強靱に、鎧や盾をより堅固なものにするのである。

その魔法により自軍の士気が一層高まったことを確認してから、ユウは敵陣に向けて剣を振り下ろすと同時に叫んだ。

「勝つぞ！——全軍、突撃!!」

数十万の兵が、鯨波とともに雪崩のように丘を駆け下る。

対するモンスター軍勢もそれに呼応して、叫喚とも怒号ともつかぬ鳴き声を上げながら、弾かれたように飛び出した。

勇者率いる連合軍とモンスターの大隊。双方が大地を揺らし、ここに決戦の火蓋が切られたのである。

「弓兵、放てえ！」

弓兵隊の指揮官が叫ぶと、勢いよく放たれた数千の矢が筈の如く空を埋める。それは先陣を切った歩兵や騎馬の頭上を越えて、豪雨の如く敵陣に降り注いだ。

バタバタと崩れる小人鬼の歩兵達。しかし彼らの進攻は止まるどころか、むしろ狂気に火が点いたかのように勢いを増した。

騎馬隊の先頭を駆けるユウが、指で剣を柄から切先に向かってなぞると、剣身がパリパリと音を発てながら白い放電を始める。

「せやあああつ!!」

敵軍の先駆けと激突する直前、ユウがその剣を真横に薙ぎ払うと、空気の張り裂ける音と同時に扇状の白い閃光——それは地面と水平に疾り、たった一撃で、百を超える小人鬼を纏めて両断しつつ吹き飛ばした。

それを見ても一向に怯まぬ獣人鬼の集団には、双刀を掲げるように構えたレグノイが、人馬一体となって突っ込む。ビリビリと突き刺さるような怒号を上げ、荒れ狂う童卷さながらの剣撃で、縦横無尽に屠り去ってゆく。

「うーん、正に鬼神の如しだなあ。これは僕も負けてられないね」とレンゾ。

彼は二人の後方で素早く呪文を詠唱——すると無数の青い魔法陣が横一列に展開され、そこからゆっくりと巨大な氷の槍が出現した。

「穿て氷なる槍よ！」

彼が杖を突き出すとその槍は高速で発射され、暴れ回る巨大な巨人鬼達の身体を、次々と精確に貫く。そして彼らの苦悶の表情ごと、一瞬にして凍り付かせていくのであった。

「我らも続けえっ！」と雪崩込むドワーフ。勇者らの奮戦に負けじと斧を振るい、槍を突き刺

す。エルフが放つ魔法の火球や光の矢が、その味方の間を縫って撃ち込まれる。

怒号、剣戟、血風、断末魔——。

斯くして、剣と魔法の世界の二大勢力が、互いの版図と繁栄を賭けて臨んだ決戦は、その開始とともに佳境へと突入したのであった。

*

「おおー、やってるやってる」

その決戦の丘から数キロメートル北に離れた、溪谷を挟んだ断崖絶壁。その縁に座って細い足をぷらぷらと投げ出している、小柄な少女。

短い赤髪と褐色の肌。円らな瞳と可愛らしい八重歯が相俟って、その印象は愛嬌たっぷりの猫といったところである。

しかし何より目を引くのは、このファンタジ

ツクな世界にはおよそ似つかわしいとは云えぬ、真つ黒なフォーマルスーツである。要人のボディガードさながらのその服装は、この世界においては異様とすら思えた。

「あのガキがこの世界の高粘度情報体か。なかなかやるじゃねーか。やっぱ転生者ってのはそこそこ戦えるもんだな？ なあクロエ？」

肉眼では砂煙すらぼんやりとしか見えぬその距離で、彼女は右眼に青い光を湛えながら、黄昏の丘の様子を観察していた。

その視界にはモンスターを次々と薙ぎ払う勇者ユウの闘いぶりが、はつきりと映し出されている。

そんな彼女の後ろには、同じく黒いスーツを纏い、しかしこちらはその上に黒のロングコートを羽織った女性が立っていた。

「与えられた力が、必ずしもそれを持つ人間を

幸福にするとは限らん」

少女にクロエと呼ばれたその女は、白い肌に艶やかな黒のショートボブ。長い睫毛に黒く澄んだ大きな瞳。筋の通った鼻と健康的な朱を帯びた唇。

それらに抜群のスタイルまでもが加えられた彼女は全身黒づくめという、些か無骨な格好であってすら美しいと評さざるを得ない。

「持たぬ者は持つ者に、弱者は強者に、初めから義務や責任を負わせようとする。本人の意志など関係なく、そういう力を与えた神様がいるという前提でな」

「ルサンチマンを隠す糞なら、確かに創造主ってのはいい建前かもね。いれば、だけど」

「まあな。だがそう考えることで、彼らは世界が自分にとってより良いものになると信じているんだらう」

「なるほどね。まあでも実際、楽しそうには見えるぜ？ 高粘度情報体ってヤツはさ」

「浮かれているだけだ。運命のようなものには後押しされていると感じれば、人はそういう気にもなる。こんな世界であれば尚更な」

「そりゃ手厳しい」と苦笑する少女の後ろで、クロエの右眼が少女と同じようにぼんやりと青く光った。

「A E O Dが情報犯罪者の座標を特定した。現場に向かうぞアマラ。物見遊山は終わりだ」

「へいへい、りょーかい」

飄々と返した少女アマラはすつくと立ち上がり、両手を重ねて悠々と背を伸ばす。

クロエは再び戦場を一瞥し、

「世界の主人公か……」

誰にともなくそう呟くと、コート of の裾を颯爽となびかせて背を向けた。

＊

決戦開始から1時間余。

丘にはモンスターも人間もエルフもドワーフも、無論彼らの乗っていた騎馬すらも、どの生物と云わずあらゆる種族の屍が惨憺たる有り様で転がっていた。

流れでた血と体液の體えた臭い、魔法で焼かれたモンスターの焦げ臭さ、下火になったとは云え依然として止まぬ怒号と断末魔——。たとえ目を瞑っていたとしても、ここが未曾有の戦場であると解る。

しかしそれ故、既にこの戦いが終息を迎えようとしていることもまた明らかであった。

戦いは開幕時の大規模なぶつかり合いから、丘の広範囲に散開した小人数同士の競り合いへと変化しつつあり、そうなってくると個人とし

ての戦闘能力が抜きん出た勇者ユウの戦いっぷりは、一層際立っていた。

「はあああッ！」

ユウが雷を帯びた剣を振るうと、3メートルはあろう巨人鬼の体は真つ二つとなり、焦げた斬り口を晒して崩れ落ちる。

彼のその異常な強さを前にして、闘争本能が強いさしものモンスター達も、次第に戦意を失いつつあった。

「勝機だぞ！ 一気に押し込めええいッ！」

それを好機とみた將軍レグノイの号令で、散開していた連合兵士達は一丸となる。彼らの被害も決して少なくなかったが、依然士気の衰えぬ連合軍の攻勢は、モンスター達を次々と呑み込んでゆく。

その波に続こうとしたユウが、転がる死骸に足を取られてよろける。その様を遠目に認めた

レンゾが声を上げて制止した。

「——ユウ！」

開戦から全力の剣を休めることのない勇者の許に、レンゾは魔法で敵を蹴散らしながら駆け寄る。

「無理しすぎだよ、流石に。魔力もロクに残ってないじゃないか」

「だ……大丈夫、まだ——やれるよ……」

ユウは肩で息をしながら、ガキンッと剣を地面に突き立てると、それに体重を預けた。

そうしていても尚ふらつくユウの肩を、慌ててレンゾが支えた。

「どこが大丈夫なんだか……。もうこの丘の勝敗は決したも同然だ。あとは騎士団の皆に任せればいい。それに——」

彼は太陽を背に、遠くに広がる大森林へと目を向けた。

その先にはこの戦いの最終目標、或いは人類最後の宿敵である、災厄竜ガアラムギーナの根城がある。

「真の戦いはこれからだ。ここで力を使い果たすわけにはいかないよ？ 彼の竜を倒せるのは、勇者である君だけなんだから」

レンゾが真面目な顔でそう諭すと、ユウは涸れた息を漏らしながら頷いた。

「うん……解ってるよ」

「じゃあ一旦退いて。そう長くは休めないけど、怪我を治してから出発だ」

*

丘の後方に張られた連合軍の天幕。分厚い皮布に遮られた空間には、一時の静けさをもたらされている。

鎧を脱いだユウが椅子に腰を掛けると、二人の魔法医が掌に浮かぶ淡い緑色の魔法陣を、彼の傷にそつと押し当てた。それによって痛みと出血はすぐに止まり、次第に傷そのものが小さくなっていく――。

そこへ天幕の垂れ布を上げて、巨軀の戦士レグノイがおもむろに入ってきた。

「無事か、ユウ」

「うん、大した怪我じゃないよ」

「勝敗は決した。こちらの被害も少なくはないが、ここから先は我ら三人のみの戦いだ」

侍従武官がそそくさと、モンスターへの返り血で塗れたレグノイの鎧の留め金を外そうとすると、彼は「このままでいい」と手でそれを制した。そして剣帯だけを侍従に渡し、用意された椅子に下カリと腰を下ろす。

「残党狩りも昼には終わる。残るは災厄竜だけ

だが、彼奴は死んだモンスターの魔力を己のものにすると云われている。神官達が規模結界で魔力の流出を食い止めてはいるが、そう長くは保たんだらう。連戦にはなるが、攻めるなら今しかあるまい」

「解ってるよ。覚悟はしている。皆の犠牲を無駄にするつもりはない」

「うむ」とレグノイは頷いて、侍従が差し出した水を一気に飲み干した。

傷が癒え、活力が戻るのを感じたユウは、魔法医らに礼を言うと再び鎧をその身に纏う。

「いけそうかい？ ユウ」

心配そうに尋ねるレンズに、ユウはこくりと頷き、鞆から白銀の剣を引き抜いた。

激しい戦闘で酷使しても尚、刃毀れひとつしていない鏡の様な刃——。彼はそこに写り込んだ自身と目を合わせる。

（僕は……勇者だ。この世界に来て、僕は初めて生きる意味を知った気がする。だからこの使命だけは、絶対に果たす。死んでいった仲間やフェメのためにも——）

4年という、一生においては短いとも云える物語の中で支払った代償は、しかし大きく代えがたいものであった。それ故この冒険は彼にとって、正に果てなく長い、人生の大いなる旅路なのであった。

（僕は勇者として災厄竜ガラムギーナを倒し、この世界を救うんだ。それが僕に与えられた運命——僕の役割なんだ）

その唯一の目的、そして己の軌跡に改めて想いを馳せながら、ユウは自答するかのようにもう一度しっかりと頷き、口を開いた。

「行こうレンズ、レグノイ。僕らの戦いの、最後の決着をつけに」

＊

丘の南西にある広大な森の中には、生い茂る木々をくり抜いたような更地があり、そこに巨大な石門が聳え立っていた。

門にはこれと目立った意匠や装飾の類は無く、その裏に建物の類があるわけでもない。ただ門扉だけが、忽然と現れたかのように建っているのである。

「災いの門……。これが災厄竜の棲み処へ続く、魔法の入口だな」

そう言って門を見上げるレグノイの横で、レンズが注意を促した。

「迂闊に触っちゃだめだからね。この門には不可避の呪いがかけられてるんだ。正式な手続きを踏まなければ、何人をも呪い殺す強力な呪殺魔法だよ。——ユウ、呪いの輝石を」

「うん」

ユウは腰に付けた小袋から、玉虫色の小さな寶石を取り出すと、それを門扉に向けて翳す。

「我が道を開かん」

彼がそう呪文を唱えると、門の周囲に絡みつく紫色の茨が浮かび上がった。しかし間もなくそれは枯れ果てて、ポロポロと崩れ去る。

そしてしばらくすると、石門は大きな音を発しながら自らの意思で招くかのように扉を開くのであった。

「くっ……」

途端に三人を襲う熱風に、レンズが思わず顔を顰める。その風は暗く歪んだ扉の向こう側から吹いていた。

しかしユウだけはそれに動じることなく、真っ直ぐと扉を見据えていた。

「……入ろう。この先に奴がいる」

その向こうにある闇を睨むユウは、逡巡（しんじゆん）など全く見せずに門を潜る——。

そうして三人が足を踏み入れた先は、マグマ噴く地下世界であった。

まるで別の大陸にでも来たかと思える、地平すら見えるほどの広大な空間。大空洞。

見上げれば空の高さにほどに岩盤があり、それがこの地の天蓋（てんがい）となっていた。

大地には溶岩の川がドロドロと流れ、地面の至る所に走った亀裂からもマグマが覗いている。

しかし凶らずともそれらが照明の役割を果たしているようで、陽光が無くとも暗くはない。

時折、少量のマグマが数メートルの高さまで噴き上がり、また遠くで地鳴りがしたかと思えば、しばらくして頭上から大きな石礫（せきれき）が通り雨

のように降り去ってゆく。

過酷と表現する程度では到底済まされぬであ

ろう、生物が棲めるとも思えぬこの大空洞は、言うなれば灼熱の地獄であった。

レンゾがすぐに熱を遮る防御魔法を詠唱し、三人がそのまま歩みを進めていくと、やがて遠くに見えていた山影から声が響いた。

「来たか勇者よ……待ち侘びていたぞ……」

「——!？」

ユウが即座に剣を抜き身構えると、驚くべきことにその山がのそりと首をもたげた。

ぎょっとして見上げた彼らの視線の先にあったのは、大樹の如き首と2本の捻じれた角を持つ怪物の頭——それは正しく竜。

そしてその口から発せられた重々しい声は、大空洞を揺るがすように木霊する。

「400年の長きに渡り、我は貴様のような存在を待っていた」

災厄と呼ばれるその竜——ガアラムギーナは、

太い鐘のような声を殷々と響かせながら、丸めていた上体をおもむろに起こす。

その体軀は黒い鱗を持つ蜥蜴のようであり、背には蝙蝠に似た巨大な翼があった。漆黒に塗り潰されたその全身の中で、蛇のような黄色い眼だけが爛々と輝くその威容は、空想物語に登場するドラゴンと相違ない。

しかし翼を広げれば100メートルは優に超えるであろう桁外れの大きさに、ユウを含めた三人は言葉を失う他なかった。

「どうした？ 勇者よ。よもや我を前にして怖気づいたわけではあるまい？ 貴様が我の滅亡を望んでいたように、我もまた、貴様との闘いを求めていたのだぞ」

「僕を待っていた……だど？」

自身に語り掛けられて、ようやく言葉を返したユウであったが、彼は自分の頬を嫌な汗が伝

っていくのを感じた。身体が重い。

「左様。今や貴様の他に、我が興味を惹かれる存在など有りはせぬのでな」

視覚に押し寄せる巨軀の威圧感。骨身を震わせるような声。ただ対面しているだけで、気力と体力が底の抜けた桶のように凄まじい勢いで消耗してゆく。

「だったらなんで、お前はモンスターを使って人々を苦しめる!? 僕にしか興味が無いなら、何故村や街を焼いた？ 人間の国を滅ぼす必要なんて無かったはずだ!」

声を張り上げつつユウが横目で仲間を見やると、レンズもレグノイも苦悶の表情で、立っているのが精一杯という様子であった。

ガラムギーナが発する魔力の重圧は、勇者である彼はともかくとして、並みの人間に耐え得るものではないのであった。

そんな彼らの様子を見て、竜の黄色い眼が一層冷たく光る。

「人間との戦争など戯れに過ぎぬ。勇者と呼ばれる貴様にどれほどの力があるか、我と対するに値するかを計るに乗じた余興よ」

「そんな……！ 僕を試すためだけに、あんなに大勢の人達を殺したっていうのか！」

「そうだ。我にとつて重要なことは、ただ真実のみ。何故我は強いのか、何故いかなる存在も我に抗すること能わぬのか」

するとレグノイが憤慨して口を挟む。

「何たる傲慢さか！ 災厄の竜よ、貴様は己が全知全能の神だとも思っているのか!？」

「そうは思わぬ。だがこの世界を創ったのが星霊イエルと呼ばれる神であるならば、何故我は彼の者を——神をすら殺し得たのだ?」

「っ……………?!」

その台詞に、今度は驚愕を隠せぬレンズが呻きながら言葉を洩らした。

「せ、星霊を……？ なんて愚かな——」

「暗愚は貴様ら人間よ。世界を救えぬ神など、存在していても仕方あるまい」

ガラムギーナはせせら笑うと、突き刺すような視線で目を細めた。忽ち三人に押し掛かる魔力は更に強まり、耐えかねたレンズが潰れるように倒れ込む。レグノイも思わず片膝を突き、ユウすらも苦し気に呻く。

「つく……………!」

「ふむ。どうやら我の見込み違いであったようだな。貴様であれば或いは、我が力の意味を推し量るに足るかと期待していたが」

しかしユウは剣を支えに食いしぱり、何とかその身を奮い立たせ、言った。

「お前っ……………なんかに！ 皆の犠牲を——!!」

「なるほど。勇者という存在は他人のため、世界のためにその真価を発揮する——そのようなものであったな？ 貴様が星霊の力を覚醒させたのも、あの王女の死が契機であったか」

確かめるように問い掛けたガアラムギーナの瞳が、興味深く、妖しく光る。

一方、ユウの瞳には怒りが宿った。

「お前が彼女を……フェメを語るなっ！」

「息巻くでない勇者よ。我はただ、貴様の力を更に引き出してやろうというだけだ」

「力を——だと!? まさか……!!」

その剣呑な声の響きに、ユウはガアラムギーナの意を悟った。そしてそれを止めようとした彼の動きを、しかしガアラムギーナの魔法が即座に封じる。

「捕らえよ深淵の鎖」

竜の口から発せられた詠唱に従い、地面から

生え出た無数の魔法の鎖が、ユウの身体を雁字搦めに縛りつける。銚のような鎖の先端が地面に突き刺さると、彼は動きの一切を封じられた。

「やめ……ろおっ!!」

唯一言葉の抵抗も空しく、ただ必死の形相で睨むだけのユウ。そんな彼の視線の先では、ガアラムギーナの巨大な口が、ちろちろと細かい炎を零しながら開かれ始めた。

「くっッ!!」

顎の内で展開される魔法陣。焦燥に駆られる勇者を見下ろす、ガアラムギーナの口角が上がる。——竜は嘲笑っていた。

「!?」

間もなくガアラムギーナの口腔から、濁流の如き炎が吐き出された。それは魔法陣を通り抜けると一条の熱線へと変化し、轟音とともにユウの横を摺り抜けた。

「ぐっ！」とユウが声を洩らしたのは須臾の間。すぐさまその視線へと目を向ける。しかしレグノイが立っていたその場所を見て、彼は言葉を失った。

「レ……グ——」

そこには鎧の下半身だけが立っていた。

そして程無くしてガアラムギーナの魔力の重圧が消えると、その半分になったレグノイの身体がガシャンと音を発して崩れ落ちた。断面ではまだ、熔けた鎧と肉が燻っていた。

「う、ううう……」

剣の師、またこの冒険で幾度となく自分を救ってくれた恩師の遺体に、ユウが縋るように手を伸ばそうとすると、しかしその動きをレンゾが一喝して止めた。

「勇者ユウ！」

「!!」

ハッとしてユウが振り返ると、毅然と立ち上がったレンゾが悲哀を噛み殺して声を張る。

「止まるな！ 僕らは皆、覚悟の上でこの戦いに臨んでいるんだ！ そして僕らが君に望むのは、そんな情けない顔じゃない！」

「レンゾ……」

「剣を取れ、勇者ユウ。今こいつを斃さなければ、レグノイやフェメ様や、散っていった仲間達の魂だって救われやしない」

レンゾは、杖が折れそうなほど手を握り締め、燃えるような眼でガアラムギーナを睨んだ。

「災厄竜ガアラムギーナ。僕は戦場で朽ちる時は、我が友レグノイと同じ時と決めている。お前には、その道連れになってもらう」

そう言っただけで自ら首飾りを引き千切る。右手には黒檀の杖、左手にはその飾りに付いていた玉虫色の石。

ただならぬ魔力を感じ取ったガアラムギーナが「ほう」と目を細めると、レンゾはそれに応えるように言った。

「これは僕が——トラエフ最強の大魔法使いが十年もの間、魔力を注ぎ続けてきた魔晶石だ。僕の生涯最期の魔法をその身で受けるがいい」

「?! レンゾ！」

制止しようと叫ぶユウであったが、レンゾの優しい瞳の中に秘められた固い決意の色が、逆に彼の言動を押し留めた。

「いいかいユウ。これは無駄死にじゃない。捨て駒になるわけでもない。これが僕の生き方だ。だからたとえ僕らが居なくなっても、君は君として生きる。勇者として戦うんだ」

改めてガアラムギーナを見据えたレンゾが杖の先端に石を当てると、石は輝きながら杖へと吸い込まれ、代わりに今度は杖自体が、眩い

玉虫色の光を放つ。

一方ガアラムギーナは、まるで早く撃つていと言わんばかりに、じっとその様を見つめていた。

「その余裕は仇になるよ、災厄竜！」

そこに勝機を得たりとレンゾが吼える。竜に向かって杖を翳すと、その先端から巨大な魔法陣がいくつも重なり合って現れた。

「生命の星よ、災禍を滅せよ！」

詠唱とともに発せられた魔力が魔法陣に吸い込まれ、そこから渦巻く柱の如く、白い光の奔流が放たれる。

大気すら巻き込むような突風と直視できぬほどの眩い閃光。その光の渦流は一瞬にして、ガアラムギーナの巨大な頭部を呑み込んだ。

余波とでもいふべき衝撃波に、ユウは思わず目を覆い、顔を背けた。

しかし数秒もするとその衝撃は止み、彼は再びガアラムギーナに目を向ける。

「な——」

彼が目にしたのは、首の中程から上が空間ごと削り取られたかのように消し飛ばされた、童の体軀。

そしてそれを果たした光は、その延長線上の遥か後方——天の岩盤すら貫通しており、そこに空いた巨大な穴から地上の光がしんみりと差し込んでいた。

「……………」

呆気にとられる一方、ユウの横には魔法を放った時の体勢のまま全ての色を失い、微動だにせぬレンズの姿。

地上に抜けた穴へと向かって大空洞の空気が流れると、その風によって彼の身体は、波に浚さらわれる砂の如くサラサラと崩れていった。

「なん……で……」

静まり返った空間で、ユウが洩らしたその言葉は、しかし散っていったレンズに向けられたものではなかった。

「なんでなんだああッ!!」

その叫びは、頭を失ったまま動かぬガアラムギーナに向けられたものであった。

何故なら彼がそこから感じる負の魔力と禍々しい気配は、一向に失われていなかったからである。それはつまり、レンズの長い歳月と命を賭した攻撃がガアラムギーナには露ほども効いていない、という証拠であった。

「うあああああーっ!」

叫び、弾かれたように飛び出す。

剣を握るユウの顔には、困惑と悲哀と憎悪。様々な感情が激しく渦巻く少年の相貌は、勇者と云うよりも悪鬼のそれであった。

「お前は一体！ 何なんだあッ！」

岩壁の如くそそり立つ竜の前足に剣を突き刺し、人間離れた脚力でもって跳び上がる。

バリバリと鱗を裂きながらそのまま斬り上がり、剣が抜けたところで身を翻すと、空中で掌を上翳した。忽ち上空に黒雲が渦巻く。

「討ち滅ぼせ我が雷撃よ！」

掌を握り、拳を叩き付けるように振り下ろすと、黒雲から発生した青白い稲妻がガアラムギーナに落下。表面を破壊し肉を抉り、ぶすぶすと立ち昇る煙が掻き消えるより早く、ユウは次なる魔法を唱える。

「穿て氷なる千の槍よ！」

着地と同時に、膨大な数の魔法陣がガアラムギーナを取り囲む。そしてそこ出でた千本の氷の槍が怒涛の勢いで襲い掛かる。

槍は身体の何処と云わず、ガアラムギーナ

の全身を埋め尽くすように突き刺さり、その傷口から血が出る間も無いほどの速さで、竜の強靱な肉体を凍てつかせた。

ユウは突き刺さったその槍を足場に疾風となって駆け巡りながら、あらゆる所を滅多斬りにして回る。

「せああああっ!!」

反撃をするどころか動くことすらせず、されるがままのガアラムギーナであったが、しかしそうして蹂躪されている間も尚、その禍々しい魔力は一向に弱まる気配を見せなかった。

「くそっ、くそっ！ なんで死なない!! なん

で攻撃が通用しないんだ!？」
ユウの持つ剣は、使用者の魔力が注がれることによって軽く、堅く、鋭く、比類ない強さを得る謂わば魔法の剣である。

やがて一頻りの斬撃の後、彼の大振りの袈

凄斬りが頑強な黒い鱗に弾かれたのは、つまりその彼の魔力が尽きた証左であった。

「っ!？」

それを待っていたかのように、ガアラムギーナの魔力が膨張し見えない壁となつてユウを吹き飛ばす。

そして地面に転げ落ちたユウの前で、ガアラムギーナの身体はドス黒い靄に覆われ、見る見るうちに破壊された箇所や失つた頭部が、元通りに再生されてゆくのであった。

重々しく、或いは神々しく響き渡る声。

「この世界の魔法は全て星霊の創りし理。ならばそれすら葬つた我に、魔法が効かぬは道理」
ガアラムギーナは存在を誇示するかのよう
に翼を広げ、洞内を揺るがす咆哮を上げた。

「我の見込み違いであつたようだな勇者よ。否、弱き者よ。神と称する星霊も、最強と謳われる

貴様も我の相手にはならぬようだ」

「な、何を……するつもりだ？」

かつてない魔力の高まりを感じて、ユウはふらふらと立ち上がりながらも剣を構える。

しかし輝きの失せた刃は濡れた石のようにくすみ、彼自身も、怪我こそ負つてはいないものの体力と魔力、そして何より立ち向かうための氣力を失っていた。

「知れたことだ。この星を破壊し、我は旅立つこの宇宙の何処かで、まだ見ぬ強き者と相まみえんがために」

「そんなこと——」

「させぬだけの力を貴様は持たぬであろう」

ガアラムギーナはほくそ笑み、直後に大音量で吼える。

その咆哮に呼応して、大空洞のそこかしこで一斉にマグマが噴出した。それは意思ある生

物の如く、うねうねとガアラムギーナの許へ集まり、大きく開いた竜の口へと流れてゆく。

マグマを吸い込むガアラムギーナの体は次第に大きくなり、膨大な量の全てを呑み終える頃には、その体軀は最初に遭遇した時の3倍程にまで膨れ上がっていた。

視界に収めることすら能わぬ巨軀と、それに比例して増大した魔力の奔流——。光源を失って闇の世界となった大空洞に、赤熱を帯びたガアラムギーナの姿が浮かび上がる。

「これぞ我が力。この世の何人さえも抗えぬ、絶対の力よ」

その余りにも桁外れな存在を前にユウはたじろぎ、先程までの怒りはおろか戦意すら失いかけていた。

しかしそこで何故かガアラムギーナの鋭い視線は、ユウではなく彼の後方へと向けられた。

「……何者だ？」

投げ掛けられた声の先——暗闇からガアラムギーナの発する光の下へ音も無く現れ出たのは、黒いスーツを着た二人組の女性。

それは黄昏の丘の決戦を眺めていたアマラとクロエであった。クロエは悠然と歩み、硬直したままのユウの横を通り過ぎ、口を開く。

「世界情報統制局だ。情報犯罪者ガアラムギーナ、お前の行為は改変法第三条の『物理法則改変』及び『情報構造毀棄』の罪に相当する。大人しく我々と一緒に来い」

巨大な竜の前にして臆する様子も無く、平然と言い放つ。そんな彼女をガアラムギーナは興味深そうに見据えて言った。

「不遜なる人間よ。貴様からは何の力も感じられぬ。そして貴様の言葉もまた我には解せぬ」
「罪状はともかく、私の力が解らないなら、そ

れはお前がその程度だということさ」

「ほう……この我を見下すとは、己の力に相当な自信があるようだ」

「自信ではない。自覚している」

「なるほど——」

ガアラムギーナは殺気とともに視線に魔力を込め、試すようにそれをクロエへ向けた。しかし彼女は表情どころか顔色ひとつ変えることなく、その視線を受け止めてみせた。

「……我が波動に耐えるとは、どうやら普通の人間ではないな？」

「いや、ただの人間だよ」

「……………」

ガアラムギーナは無言のまま、黄色い蛇の様な眼を妖しく光らせていた。

その沈黙が、クロエの台詞を咀嚼するための間であるのか、或いは彼女らが敵であるか否か

を判断している時間であるのか、それは本人以外知る由もない。

ユウもまた状況を理解できぬまま、クロエの背中を見つめる。やがて彼が疑問を投げ掛けようと口を開きかけた時、先に静寂を破ったのはアマラであった。

「で、どうすんの？ クロエ。連れてくにしても、なんか素直に聞いてくれそうなタイプにゃ見えないぜ？」

「構わん。強制的に連行する」と素っ気なく台詞を返した彼女を、ガアラムギーナが嗤う。

「強制とは。よくも我を前にして、かように尊大な台詞を吐けたものだ。面白い。貴様らが何者かは解らぬが、我を制する力があるというのなら見せてみよ」

太い鐘の音のような声が高く響き渡る。ガアラムギーナは山の如き体軀を反らして、後ろ脚

で立ち上がった。その動きだけで、地響きと颯風が大空洞を揺るがした。凶暴な顎がまたしても炎を洩らす。

「アマラ、IPFを展開しておけ」とクロエ。

「あいあいさー」

応えたアマラの右眼が青く輝くと、彼女を中心に発生した淡い虹色の膜が、瞬く間に大空洞全体を包み込んだ。

「志向性散逸構造場の展開確認。エントロピー

反転準備よし。いいぜクロエ、手短にな」

「無論だ」

クロエは懐からハンドガンを取り出し、彼女を見下ろすガアラムギーナに面と向かってそれを構える——。強大で無慈悲な災いの竜とたった一人の小さな人間。傍から見ればそれは余りにも差があると言わざるを得ない。

ガアラムギーナは恐ろしい咆哮を上げた直後、

口から捻じれた火炎の柱を吐き出した。クロエの後ろに控えていたユウは、すぐに襲い来るであろう灼熱の地獄に覚悟を決めた。

しかしそんな彼の予想は、彼女が放った一発の弾丸によって吹き飛ばされるのであった。

クロエが引き金を引いた瞬間——鈍く染み渡るような金属音。銃口から発生した凄まじい突風と衝撃が、周囲の土や石を吹き飛ばす。

「ツツツ!？」

弾は一直線に炎の渦へ向かい、それを難無く掻き消してガアラムギーナの喉を貫いた。

予想外の一撃、そして想定すらしていなかった激しい痛みにも、ガアラムギーナは苦悶の声を上げた。

ひと羽ばたきした翼で身を守るように回転しながら宙高くへと舞い上がり、上空で再び翼を広げる。露わになった血まみれの顔は怒りに

染まっていた。

「貴様……!!」

ガアラムギーナは前面の広範囲に渡って、その巨体が隠れるほど膨大な数の魔法陣を出現させた。魔力を全身に漲らせ、火山の噴火を思わせる炎でその魔法陣を薙ぎ払う。

クロエがそれを察知してすぐさま跳び上がると、魔法陣から発した真紅の光線は、空中で不規則な弧を描きながら彼女に襲い掛かった。

しかし吹き荒れる嵐の如きその光線群を、クロエはサーカスのアクロバットよろしく、縦横無尽に華麗に避ける——遠目には、さながら無秩序に舞い踊る木の葉の様であった。

彼女に回避された光線は無差別に天蓋や地面を抉り、凄まじい爆発を巻き起こす。そのうちに弾かれた岩や熱風が、ユウと彼のすぐ傍に立つアマラにも襲い掛かる。

「くッ……!!」

咄嗟に身構えたユウであったが、しかし爆発は彼の身に届く前で静止していた。そして彼が言葉を発するより早く、吹き飛んだはずの岩石や地面は、まるで時間が巻き戻されていくかのように、立ちどころに元の状態へと戻ってゆくのであった。

（なんだ?! 魔法とは違う、これはもっと異質な力だ。この人たちは一体……）

そんなユウの怪訝な視線を感じ取ったものか、アマラが空を見上げたまま言った。

「お前には視えないと思うけどさ? 今この場には志向性散逸構造場——通称『IPF』ってのが展開されてんだよ」

「IPF……?」

「こそ。簡単に言えば『エントロピーを逆行させて任意の物理現象を巻き戻す領域』かな。ま

あそれは副次効果みたいなもんだけどさ」

「……………」

その説明に啞然とするユウ。

「それより俺らがI P Fを張る目的は、その中なら情報改変力を自由に使えるようになるってことだ。つまりさ——」

アマラが上を見上げたので、ユウも彼女の視線を辿って上空に目を向ける。

「この世界の設定を無視できるんだ」

その先にはガアラムギーナの攻撃を掠らせもせず、その眼前にまで肉迫したクロエの姿があった。

「貴様……！ 一体何者だ？」

天蓋の穴から差し込む光が黒いスーツの間を浮き彫りにする。

驚愕を隠せぬガアラムギーナの前でクロエは宙で身を捻りながら、

「少し痛いぞ？」と一言。

そのままクルリと縦回転して、しなやかな蹴りを竜の脳天に叩き付ける。

「ツツツ!!」

隕石が直撃したかのように強烈な一撃。

クロエの細い脚は鱗を容易く粉碎し、ガアラムギーナは凄まじい勢いで真下に墜落。姿勢制御もままならず地面にぶつかり、その衝撃と突風が塵を巻き上げる。

圧倒的という言葉では足りぬ異次元の強さを見せてつけるクロエと、彼女の力の前に為す術もなく討ち斃されるガアラムギーナ。想像だになかったその光景に、ユウはただ茫然と立ち尽くすのみであった。

「ガアラムギーナが……」

上空から見下ろすクロエは、相手が完全に沈黙したのを確認してゆっくりと降下してきた。

フワリと降り立った彼女を、

「お疲れい」とアマラが陽気に労う。

「整合性に乱れは？」

「無えな。エントロピーの流れは正常、IPFの復元性もほぼ完ペキだぜ」

「了解した。では情報犯罪者を転送しておけ」

「あいよ」

アマラが頷くや否や、地に伏して動かぬままとなっていたガアラムギーナの身体が、瞬時に収縮して光の粒となって消え去る。

「よし、転送完了。あとは——」

ユウを差し置いて話を進める二人の会話を、しかしそこで彼が唐突に声を上げて遮った。

「あのっ！」

「……………何か？」とクロエ。

今しがたの戦闘で見せた桁外れの力と、息を呑むほどの美貌を併せ持つ彼女に見据えられて、

ユウは一瞬言葉に詰まる。

「っあ、あの……貴方たちは何者なんですか？

いきなり現れてガアラムギーナを——」

「我々はWIRAだ」

「？……ウィラ？」

「亜世界の保護と情報犯罪の取り締まりを目的とする源世界の組織、世界情報統制局——通称『WIRA』。私とこのアマラは、そのウィラに所属する第一等情報規制官だ」

「……………」

何ひとつ理解できぬといった表情で固まるユウを、クロエは再び差し置いてアマラへ告げる。

「被害者は2名だけだったな。アーカイブから復元しておけ」

「あいよ」と応えながら、アマラは宙で手の平を滑らせる。彼女の光る眼には膨大な量の記号の羅列が映し出されていた。それをテキパキと

組み替えながら、やがてパチンっ指を鳴らす。

「オツケー。出るぜ」

すると彼女らの目の前で、突如青い光の粒子が瞬いた。現れては消える光は細やかな火花のようにも見えたが、程無くするとそれらは集まり、やがて固まりとなって何かを形成してゆく。

「これは……」

不可思議な光景にユウが目を奪われている間に、青い光は次々と形を——人間の骨格と思しき物へと変化してゆく。と同時に、血管や筋線維が絡み付き、臓腑や眼球が作られ、それらを皮膚が覆うと今度は頭髪や体毛が生え出る。

「そんな、まさか——」

ユウが口にするより早く、彼の前には二人の人間が出現した。

「レグノイ……レンゾ……」

彼の言葉通り、それは先の戦いで跡形も無く

消え去ったはずの仲間であった。

服も鎧も全てが元通りに復元されて蘇った二人は、自分たちの身に一体何が起きたのかを理解できず、不思議そうに辺りを見回す。しかしすぐにユウの姿を認めると声を上げた。

「ユウ！」

「二人とも……良かった……」

「彼奴は——ガラムギーナはどうした？ それにこの者らは？」

レグノイは剣を取り、古強者らしく瞬時に状況把握に努めるものの、一方レンゾは安堵した様子でユウを抱き締めた。

「ギーナの魔力を感じない。勝ったんだねユウ。ありがとう」

「！ いや、僕は……」

「？」

レンゾの台詞に口ごもるユウ。そして怪しげ

な女二人を訝しむ様子で睨むレグノイを他所に、クロエはこめかみに手を当て、右眼を青く光らせながら言った。

「帰還するぞ、アマラ」

「りょーかい」

しかしその二人の背中に、

「待ってください！」とユウが慌てた様子で声を掛ける。

鼻で溜め息を吐いて振り返るクロエ。

「まだ何か用があるのか？ 言っておくが私たちが消えれば記憶は残らないぞ」

「記憶が？ —— いや、それでも聞いておきたいんです。ガアラムギーナはどうなったんですか？ 貴方たちは何処から来て、それにどうやってレグノイ達を……さっき『被害者は2名だけ』って言っていましたけど、あいつに殺された人は沢山いるんです。フェメヤザナイやキー

ルさんや、エルフの村の人達だって——」

捲し立てるように疑問を吐き出すユウに、アマラは無言で頭を掻く。クロエはもう一度溜め息を吐いてから仕方なく口を開いた。

「お前達がガアラムギーナと呼んでいた男は、我々の世界の基準でいうところの犯罪者だ。あの男の情報改変力が、この亜世界の許容値を超えた故に我々が派遣された。情報犯罪者として源世界へ連行するためにな」

「は……？」

「源世界というのは情報次元から発生した最初の宇宙、私やこのアマラが属する世界だ。そして今いるこの亜世界は、その源世界の人間の共通概念によって生み出された実体の無い宇宙。謂わば想像の産物だ」

「何を——想像の……？」

「それと今回の被害者はその2名のみで間違

いない。あの男がこれまでにしていたことが何であれ、情報犯罪者として認定される以前の出来事に対して、我々は関与しない」

事務的な口調でクロエが「以上だ」と告げ終えるとしばらくの間、重い沈黙が続いた。彼女の言った言葉の全ては理解できないにしても、少なくともその中のいくつかの事実は、ユウやレグノイやレンゾにとってあまりにも衝撃的な内容なのであった。

遠くで噴き上がるマグマや、断続的だが終わることのない地鳴りがその静寂を饒舌に語る。

突拍子もない、或いは荒唐無稽な話であるにも関わらず、何故かクロエの言葉は否定や疑念の余地が一切無い、天啓の如き確かさを持っていた。それ故レンゾは考え込み、レグノイは無然とし、ユウは表情を隠すように俯いていた。

しかし時が経つにつれ、だらりと下げられ

ていた彼の手に力が籠り、やがて固く握り締められていく。

「……何だよ……それ……」

か細い声で掠れ掠れに呟きつつも、その拳は抑え切れぬ感情に震えていた。

「——ざけ……な……」

ギリギリと奥歯を鳴らす。そして、

「……………ふざけるなツツ!!」

顔を上げたユウの目には怒りと、僅かに涙。

「僕が……!! 僕らがっ!! どれだけの思いでここまで来たと思ってるんだ!!」

弾かれたように飛び出し、拳を振り上げるユウ。しかしそれを予知していたのか、レグノイが咄嗟に止めに入った。幹のような太い腕で後ろから抑え、「やめておけ」と低く一言。

「離せよレグノイ! この人たちは知ってたんだ、この世界で何が起きてるのか——町が焼か

の世界に戻してやる」

クロエがそう言うと、しかしレグノイが一瞬俯いてから「いや——」と首を振った。

「その必要はない。異なる世界の人よ」

「……何？」

「戻さなくていいと言ったのだ。貴殿らの言葉は生半に受け入れ難いものではあるが、それが嘘ではないということは眼を見れば解る。こう見えて俺もそのレンズも、それなりに修羅場を潜り抜けてきたのでな。だがそいつはまだ若い。勇者としてどれほどの力があるうとも、不都合な真実と向き合えるだけの強さは身に着けておらん。だからこそ貴殿らに頼みたい」

レグノイはレンズと目を合わせる。その言葉の続きを察してレンズが頷くと、彼は再び口を開いた。

「——ユウを導いてやってくれ。結末はどうあ

れ、そいつは間違いなくこの世界で、勇者とし

ての務めを果たした。だがそれは俺達が、或いはこの世界がユウに望んだ道であって、そいつ自身が選んだ道ではなかったはずだ。だからユウには今一度、その源世界とやらで真実と向き合い、正しく自分の道を生きてもらいたいのだ」

レグノイが深々と頭を下げると、レンズもそれに倣う。二人の真摯な態度にクロエは小さく頷いてから「了解した」と返した。

「んじゃ、まあとりあえず帰還するけど？ いかいクロエ？」

アマラが、ようやく話が片付いたかと息を吐いて、大きく伸びをしながら尋ねる。

「ああ問題ない。帰るとしよう」

クロエは短く言うてから、こめかみに指を当てる。すると次の瞬間には、音も光も発することなく彼女らの姿は消失していた。

*

——2063年12月。

量子情報学者アルファ・コールマンが「宇宙は、時空間とエネルギーが存在する物理次元と、それらの情報のみが存在する情報次元によって構成される」とする『情報次元論』を提唱。

——2068年4月。

先進国が共同で行っていた次世代型量子コンピュータ開発プロジェクトにより、極めて優れた知性と自我を備える人工知能『ADAM』が誕生。以降ロボット、アンドロイド、ヒューマノイド等はADAMを基に改良され、包括的に『創られた知性』と呼称されるようになる。

——2069年10月。

情報次元論の研究により、「物体が持つ情報

は質量・エネルギーとの等価交換が可能」という『コールマンの法則』が発見される。

——2073年1月。

ある枠組みで捉えた特定の物理構造は、情報次元上において独自の特性を持つということが確認される。なかでも「人間」は、情報を直接書き換えるエネルギーのようなものを生成しており、この器官的性質及び構造が『クオリアニューロン』と命名された。

——2074年6月。

クオリアニューロンが生み出す力を用いることで、エントロピーの可逆変化が可能であることが発見される。その力は一般にアルター・エントロピーと呼ばれる。

——2079年11月。

アルター・エントロピーを使った量子の情報操作技術が確立され、ほぼ全ての元素の性質や

量子的振る舞いを再現できる量子マシン『元素デバイス』が開発される。

——2081年2月。

分割解釈が不可能な42種類の情報の最小概念『情報子』を用いることで「この宇宙に存在する全ては完全に記述可能である」ことを、ADAMが数学的に証明。科学による真理への到達を示唆した。

——2081年9月。

ADAMの証明が神の存在の否定であるとして、宗教団体の一部過激派が世界中で大規模なテロを実行。これを発端として原理主義者と科学自由主義者との戦争が勃発。後に『AI戦争（または人類回帰のための聖戦）』と呼ばれるこの戦争は、瞬く間に戦火を拡大しやがて核兵器を用いた世界的大戦へと発展した。

——2082年5月。

ニューデリーの人口知性研究施設が爆撃を受け、インテレイドの生みの親アルファ・コールマンが死亡。享年22歳。

——2085年12月。

各国の主要都市及び世界的な自然環境の破壊により、「勝者のいない戦争」としてAI戦争が終結。

——2091年7月。

先の大戦による戦禍修復のため、新地球主義者を主とする各国政府の働きかけにより、人類の大半が地球から月と火星に移住。

——2100年2月。

元素デバイスのエンタングル通信機能を利用した有機ネットワークリンクシステム、通称『OLS』が誕生。僅か1年で普及率が人類の99.99パーセントに達する。

——2113年4月。

世界情報次元調査局設立。観測用インテレイド『A E O D』による情報次元探査プロジェクトが発足。これにより情報次元に実体の無い宇宙が存在することが確認され、当局はこの宇宙を『コードL M 1』と命名。

——2114年8月。

L M 1の情報を解析した結果、その宇宙の性質や形態が、人類に親しみ深い空想の世界に酷似していることが判明。これを受けて当局はその別宇宙を『亜世界』と命名し、また差別化のために現実の世界は『源世界』と呼称されるようになった。以降2130年までで、延べ4万5千個の亜世界が発見される。

——2130年7月。

個人の存在情報を『情報体』として亜世界に関連付けることによって、源世界の人間を亜世界へと転移させる次元転移技術が確立。そのた

めの転移装置『クリサリス』が開発される。

——2135年5月。

亜世界コードC T 2に向けた人類初の次元転移実験が行われる。しかし現地で発生した事故により、C T 2及び被験者は消滅。また同時に源世界においても2千万人を超える人間が消滅したと推定されるが、存在情報そのものが消失したため、誰一人として「誰が消えたか」を特定するには至らなかった。

同年12月、世界情報次元調査局は、この全世界における人間の完全消滅等について以下のような発表を行った。

(当局内部資料より抜粋——)

「亜世界とは、多くの人間に認識・共有化されることで構築された想像上の世界観が、各個人の持つアルター・エントロピーによって固定化

されることで創造され得る、新たな宇宙である。亜世界が消滅した場合、創造に深く関わった人間の情報も当該世界とともに失われ、消滅に至るものと考えられる。この消滅現象は、情報改変によるエントロピーの加速的な増大や整合性の欠損により、亜世界自体が情報を維持できなくなった場合に発生する。以降当局では、この両世界の情報消失現象を『F.R.A.D.（致命的且つ破滅的な情報改変災害）』と呼称する。また関連して、クオリアニューロンから発生し情報そのものを改変する力を、現在の俗称であるアルター・エントロピーから『アルテントロピー』へと改めるものとする」

——2137年2月。

亜世界には過去の源世界から偶発的に次元転移した人間が存在することが確認され、『転移

者』と呼ばれるようになる。また彼ら転移者の多くは強力なアルテントロピーを保持していることから、F.R.A.D.を誘発する恐れが高いとされた。

——2138年4月。

F.R.A.D.及びそれへと発展する恐れのある情報改変を規制する国際法『亜世界情報改変規制法（通称・改変法）』が成立。

——2140年10月。

世界情報次元調査局は組織名を『世界情報統制局』と改め、改変法違反の取り締まりのための独立執行機関として再編。これに伴い、現場実務に当たる亜世界情報規制官として、極めて強力なアルテントロピーを保持する者達が選出・任命された。

その彼らは後に、情報次元の絶対摂理を司り、亜世界とその設定を護る者として『規制官』と

呼ばれた——。

*

見渡す限りの草原。蒼空に見下ろされ横たわるユウの頬を、穏やかに揺れる小花が撫でた。

「……………」

彼を呼び覚ました陽光は、視界の端にあって不思議と眩しくはない。むしろ心地よく、かつてこれほどまでに清々しい目覚めがあっただろうか、と思わせる快適な環境であった。

「お目覚めだな？」

傍から掛けられた声に目を向けると、そこには黒いスーツを着た少女が立っていた。

短く無造作に切られた赤い髪と褐色の肌。

八重歯を覗かせてニシシと笑う無邪気な笑顔は、自由奔放ないたずら猫を連想させた。

「あの——」

「源世界だぜ。ここはさ」

身を起こしながら尋ねるユウの言葉にその少女が台詞を被せる。

「俺はアマラだ。アマラ・ヒミカ。お前がいたコードHF230——つっても分かるワケねえか。あの剣と魔法の世界でクロエと一緒に会ったはずなんだけど、憶えてる？」

「え？ はい。あのそれより僕は——いやレンゾやレグノイや、それに騎士団の皆はどうなったんですか？」

あまりにも唐突で予期せぬ状況にユウは困惑を隠せない。それであってもまず気にかけてのは仲間のことであった。

そんな彼の台詞を聞いてアマラは再び八重歯を見せた。

「優しいんだな、お前」

「え？」

「残念だけど、ここにいるのはお前だけだよ。

亜世界人は源世界に來られないからな？ でもまあ向こうのヤツらは心配しなくていいよ。あの情報犯罪者がいなくなつて、本來あるべき設定に戻つたからさ」

「そうなん……ですか……」

「ちなみにお前のことに関しても、あのオッサンからよろしく言われてっからね？ 俺らの記憶は消えても納得は残る。だからお前は自分のことだけ考えりゃいい。まあ悪い方には進んでねえと思うぜ？ ここにゃ危険は無いし、心も体も状態は万全なはずだ。この部屋は転移者向けの快復室だからな」

「ケア……ルーム？」

言われてみれば確かに、クロエらに対して烈火の如く燃えていた彼の心は、今は驚くほどに

平静を取り戻していた。

そればかりか戦場で負つた傷の痛みや疲れも無く、身体はむしろ軽いぐらいであつた。身に着けている鎧ですら、金属の冷たさや肩の重みを感じさせずにいた。

しかし部屋と呼ぶには相応しいとは思えぬ景色を、ユウが小首を傾げながら見渡していると、アマラが指をパチンと鳴らした。それをきっかけに草花は色を失い、真っ白な砂粒のようになつてサラサラと地面に溶け込んでいった。

「?!」

遠景としか見えなかつた風景は壁へと変わり、ほんの一瞬でそこは、30m程ののっぺりとした白い部屋になつた。

「それも戻しとくぜ？ 名残り惜しいかもしれねえけど、その恰好じゃ流石に変態だ」

アマラがそう言うと、ユウの着ていた服や鎧

も先程の草花と同様に白い粒となって崩れ落ち、彼の身体の表面には銀色の膜のようなものだけがピッタリと張り付いていた。

全身くまなく覆われているものの、見慣れぬ上に着ている感触すら無い奇妙な服に戸惑うユウ。

「なっ、何ですかこの服」

「服じゃなくて外装皮膚だよ。亜世界でいうとこの衣服って代物は、昔はともかく今の源世界には無えんだ。勿論俺のスーツもマスキングな色や形は好きに変えられる」

「はあ……」と釈然としない声を洩らしつつ、ユウは自分の手足や胴を擦る。ボタンやファスナーはおろか、縫い目の類すらどこにも見当たらない。

「これ、どうやって脱ぐんですか」

「脱がねえよ」

「えっ、じゃあお風呂とかトイレは？」

「だから言ったろ皮膚だって。お前は風呂入るたびに皮膚移植すんのか？ しねえだろ？ 入りたきゃ勝手にそのまま入れよ。排泄もそのまましる。汚れないから」

アマラは呆れた様子で言い、「んじゃ行くぞ」と親指で促した。

アマラに連れられて出た先は、窓も備品も標示板も無い、只々真つ新な床と壁だけが続く廊下であった。

ユウはなんとなく「宇宙船みたいだな」などと思いながら、彼の半歩先を足早に歩くアマラに尋ねる。

「源世界って、僕が元々いた世界とも違うんですね。僕が剣と魔法の世界へ飛ばされる前にいたところも亜世界だったんですか？」

するとアマラは歩を緩めることなく背中越し

に答えた。

「いや？ 転移者が最初にいた世界が源世界だ。だからここはお前がいた世界と同じだよ。ただ時代が違うだけだ。亜世界ってのはこっちは違う次元にあるからな」

「違う時代って、じゃあ今は何年なんです？」

「107年。グレゴリオ暦だと2175年だな」

「にせん……ひゃく——!？」

ポカンと口を開いたまま、肩を落とすユウ。

「……僕のいた時代には戻れないんですか？」

「残念だけど無理だね。クリサリスが無い時代じゃ肉体を再構築できねえからな。ちなみにクリサリスってのは、亜世界と源世界を行ったり来たりする機械のことな？」

「はあ。そうですか……」

溜め息を吐いたユウがしょんぼりと俯きながら歩いてゆくと、やがて壁の前で急に足を止め

たアマラの小さい背中にぶつかつた。

「あっ——と、すいません」

「ここが統制室だ」

「……？」

不思議そうに小首を傾げるユウには構わず、

アマラは袋小路の壁に向かって躊躇いなく進む。

すると白い壁は、彼女の身体が接触する部分

だけ——正確には触れる数センチ手前から、その

形に合わせて退くように穴が空いて、すんな

りと彼女を受け入れるのであった。

「お前も入んだよ」

立ち止まったままのユウに声を掛け、その手

を引っ張る。するとやはり壁は、ユウの身体が

触れる前に滑らかに退いて彼を呑み込んだ。

「うわ、ちょっと——？」

壁の厚みは数センチ程しかなく、ユウが思わず瞑った目を再び開いたときには、既にその先

の部屋の中であつた。

アマラが統制室と呼んだ部屋は廊下と同じく何の意匠も施されていない、ただ白い壁と床に包まれた円形の部屋であつた。

唯一これまでと違うのは、部屋の中央には真ん中がポツコリと球状に膨らんだ細い柱が立っているということである。

その球体の傍らには、アマラやクロエと同じ黒いスーツを着た男。彼は奇妙なことに球体に向かって話しかけていたが、ユウ達が入ってくると彼に向き直つて言つた。

「すまないね、覚醒して早々に呼び出してしまつて」

年齢は40代と思しい。中肉中背で、きつちりと七三に分けられた栗毛の頭。中東系のこれといった特徴の見当たらずな顔立ちであつたが、洗練された立ち居振る舞いには品格が漂つてい

る。しかし無感情に射貫くような黒い瞳は、どこか人間性が欠落しているような、気味の悪さをユウに感じさせた。

「もうすぐ彼女も来るので、こちらで座つて待つているといい」

アマラは部屋の隅に立ったまま、ユウが促されて部屋の中ほどに来ると「そこでもいい」と男。床に座れということかと、戸惑いながらユウが腰を下ろそうとすると、その動作に合わせて床が瞬時に盛り上がりソファの様な形になつて、彼の身体を優しく受け止めた。

間もなく二人が来た方向とは別の壁が開いて、背の高い黒髪の女性が入ってきた。それは紛れもなく剣と魔法の世界でユウが出会つた規制官、クロエであつた。

(あ……)とユウは、クロエを見て改めてその外見に息を呑んだ。

彼女の見た目は20代半ばといったところで、身長はユウよりも少し高い。だが全体に占める脚の長さの割合が、彼とは圧倒的に違っていた。ちなみに彼の名誉のために云っておくならば、別段ユウが短足というわけではない。

クロエは艶やかなショートボブの髪を揺らし、コツコツとスタックカートに革靴を鳴らして、しなやかに歩く。端正な顔立ちと女性らしい魅力に溢れた完璧なスタイルには、正に非の打ち所がない。ユウはかつてこれほどの美女——というより美しい生き物を見たことがなかった。

彼女が男の横にまで来て、ピタリと止まると、七三の男はスーツの襟を正しながら、先程のユウと同じく床から生えてくるソファに座った。「本題に入る前に、まずは自己紹介をさせてもらうよ。私の名前はジョルジュ・ノマド。この世界情報統制局の局長を務める者だ。そして彼

女は——」

と言つて、ジョルジュは部屋の中央にある柱に視線を移す。

「彼女はルーシー。地球圏に存在するインテレイドの中で唯一、第3世代の知性を獲得したインテレイドだ。彼女は各亜世界に配置されたAEODのコアであり、ここの副局長でもある」すると『宜しく願います』と、部屋全体にどこからともなく女性の声が響く。

「そして彼女らは……もう知っているね？ 第一等規制官のクロエ・ゴトヴィナと、同じくアマラ・ヒミカだ」

「はい」と頷くユウ。「規制官は他にも沢山いるが、それは機会があれば紹介するでしょう。それと君の名前についてだが、今の源世界では命名にも細かなルールがあつてね。過去からの転移者には、それに準

じた名を我々が付けることが慣例になっている。故に君の名前はこちらで決めさせてもらった」

「え——？」

異論を挟む余地も無く、ジョルジュがスッと手を横に振ると、彼とユウの間の宙に突然文字が出現した。

「君の名は『ユウ・アルゲンテア』だ。いきなり名前が変わるといふのは好ましく感じないかもしれないが、そこは適応してくれたまえ。適当とは前に進むことだ」

「は、はい。解りました」とユウ。ジョルジュは満足そうに微笑みを浮かべ、

「よろしい、では本題に入ろう。——既に理解しているとは思いますが、この源世界はかつて君が存在していた世界とは時代が違う。つまりこの世界に君の家族はいない。酷な話ではあるが、それが現実だ」

「……理解しています」

「そこで君には、火星にある未成年転移者向けの養育施設に入ってもらふことになる。そこでゆっくりと心のケアをしながら、この時代の文化に馴染んでゆくと良いだろう」

「はい……」

ユウは小さく返事をしたものの、その表情は積然としない様子であった。

急激とも云える人生の転換期は過去にもあった。かつて剣と魔法の世界に転移した時がそれである。しかしあの時とは違って、今回のジョルジュの提案は、自分の意志が介入する余地が一片も無い、現実らしい理不尽さを覚えた。

「今は多少の不安もあるだろうがね、アルゲンテア君。だがこの世界は君がいた亜世界とは違う。無益な争いは無く、平和そのものだ。子供に命がけの戦いを強要する者など、どこに

もない。もう戦わなくていいんだよ」

そう言ってジョルジュは、しかし笑顔を見せず無感情な顔でユウの頭を撫でた。

「では話は以上だ。クロエ、彼を部屋に」

「了解しました」

クロエがすつくと立ち上がり、彼女に促されてユウもソファを立つ。しかし彼は付き従って踏み出した足を数歩で止めると、再びジョルジュの方に振り返った。

「あの——」

「……何か質問かね？」

「あの、あいつは——ガラムギーナはどうなったんでしょうか？」

「彼の処置は確定していないが、恐らく3ヶ月程度の情報犯罪者更生プログラムを受けることになるだろう」

「たった……3ヶ月？ それだけですか？ あ

んなに多くの人間を殺して、いくつも国を滅ぼしたのにな？ それなのにたった3ヶ月の罰を受けるだけなんですか？」

「罰ではなく修正プログラムだが、その通りだよ。源世界が彼に対して科すのは、あくまでアルテントロピーを用いた情報犯罪についてののみだ。彼が亜世界の住人として生き、その世界の設定に則って行った行為に関しては、処罰や言及の対象にならない」

抑揚なく話すジョルジュの事務的な説明に、ユウの不満は声色にまで顕れた。

「じゃあ殺人を犯しても、裁かれないっていうんですか？ 罪の無い人々を殺したっていうのに、そんな理不尽なことってありますか?！」

「では君は、蜘蛛の巣にかかったからといって蝶だけに手を差し伸べると言うのかね？ そちらのほうが余程理不尽だ。それに君も、大勢の

蜘蛛を殺してきたのだろうか？」

「……っ——！」

その台詞がほんの一瞬、言葉を詰まらせる。

「それは……でも僕が倒したのは、モンスター
だけです」

「なるほど。だが君は今『行為について』話を
していたのではないかね？ 対象を限定する
というのならば、その合理的な根拠が必要だ」

「根拠って——そんなの、だってモンスターは
悪いやつじゃないですか！」

言葉に熱を帯びるユウに対して、ジョルジュ
は、そして黙って立っているクロエもアマラも、
その態度は冷静そのものであった。

「いいかね、アルゲンテア君。『悪』というの
は構造の二形態に過ぎない。他者との関係性に
おける利害の不一致と云っても良い。完全に孤
立した存在に対して、悪という概念は意味を成

さないからね。つまり著しく客観性に欠けるも
のだ。もし君が善悪を語りたいのならば、当事
者の外から物事を見たまえ」

「でも……だって——」

口ごもるユウが反論もできずに俯いてしま
うと、ジョルジュは立ち上がり、そのまま何も言
わずに背を向ける。

ユウは口惜しそうな目つきで、ただ立ち尽
きたままその背中を見送ることしかできなかつ
た。

*

細まった通路をユウと共に歩きながら、クロ
エは淡々と説明をした。

「ルナインダスを経由して、火星のジュヴェン
タエまでは5日で到着する。航行中はノンレム
睡眠になるのでストレスは無いだろう。個人差

はあるが体感的には1時間程度の旅だ、気楽に行けばいい。景色は観られんがな」

「……………」

「必要な情報は事前に伝達してある。嗜好品はインテレイドが用意してくれるが、OLSへの登録が済めば不要になる」

「……………」

「それと任務中でなければ、月に一度はOLSで私が面会を行う予定になっている。監察官と謂うと聴こえは悪いが保護者の代わりだ。それ以外でも緊急であれば、いつ声を掛けてくれても構わない。もっとも私などより、施設のインテレイドの方が親しみやすいと思うがな」

「……………」

「ポッドの出発は12分後を予定している。何か質問はあるか？」

「……………あの——」

ユウは足を止めて、先を歩くクロエの背中へ目を向けた。

「？」と振り返るクロエ。

「あの——僕、やっぱり行きません」

「……………何を言っている？」

クロエは表情を変えることなくユウを見つめた。その視線に一瞬物怖じしたようなユウであったが、すぐに覚悟を決めて見返した。

「すみませんクロエさん。でもやっぱり、僕は

行きません。行きたくないんです。……………火星に

僕の道は無いような気がして」

「……………酷な言い方だが、この源世界で他に君が行くところなど無いぞ、少年。誰しも意志は尊重されるべきだし、個人には個人の自由があつて然るべきだが、君の場合はまずそのための適切な判断力を養うことが先決だ」

「それは解っています。確かに今の僕にこの世

界での居場所はない。でも別の世界なら、僕が進むべき道がある……そう思ったんです」

するとクロエは「ああ、そういうことか」と溜め息を吐く。その先のユウの台詞は果たして彼女が察した通りのものであった。

「僕をここで働かせてください！」

予想通りにユウが深々と頭を下げると、彼女は一考にも値しなと言わんばかりに、

「駄目だ」と一刀両断の一言。

しかし当然ユウもまたその返答を予知していたようで、頭を下げたまま食い下がる。

「お願いします！ 僕は源世界ではまだ未熟かもしれませんが、亜世界でなら大人にだって負けません。それにまだ子供だからって言うならアマラさんだって——」

きっぱりと言いつける彼の言葉を聞きながら、クロエは再び小さな溜め息を吐いた。

「勘違いするなよ、少年。源世界にいようが亜世界に行こうが、その人間が別人になるわけではない。確かに君が亜世界に戻れば、情報体アイントマに添付された魔法や剣の技術を使うことは可能だろう。しかし勇者キョウナの力に頼って道を選ぼうとするのであれば、それは妥協に過ぎない。君は自分で道を選んだつもりで、実際には力に道を選ばされているだけだ。子供だからどうこうという話ではない。それとついでに言うっておくが、アマラはあれでも成人オトコだ」

「……………」

ユウが黙り込んだ空白の時間に、機を得たかのように館内アナウンスが響く。

『間もなくポッドの出航時間です。搭乗予定の方はゲートへお急ぎください』

「——僕は……それでも僕は規制官になりたいんです。僕の道はきつとそこにあるから」

「そうか。だが駄目だ」

「なんでですか!? だって僕は——!」

「それは君が弱いからだ」

「!?」

ユウは予想だにしないクロエの評価に言葉を失った。彼は少なくとも剣と魔法の世界という広大な世界において、史上最強という自負があったからである。剣においては剛剣將軍とも謳われたレグノイに勝り、魔法においては大魔法使いであるレンゾにすら引けをとらない。そして彼はその両方を併せ持つ勇者なのである。

ユウは数瞬の間も置かず反論した。

「僕が弱いってというのは、どういう意味ですか」

するとクロエは、彼の自信など歯牙にもかけぬといった様子で言い切った。

「そのままの意味で言ったつもりだ。君の持つアルテントロピ―は低過ぎる。我々規制官が相

対すべき情報犯罪者には遠く及ばない。それはあのガアラムギーナとやらとの戦闘でも理解できたはずだ」

「そんな……じゃあ僕は——」

やっと思つた勇者の道を、もう歩むことはできないのか。そう思いつつも、

(……イヤだ、それでも諦めたくない。ここで諦めるようなら、最初から勇者になんてならない!)

ユウは再びクロエの顔に、純粹で強い眼差しを突き付けて、その決意を声に出した。

「それでも僕は、規制官になります!」

「……………」

物音ひとつしない白い通路にユウの宣言が響き渡り、その後にもまた静寂が戻る。

クロエは困り顔で三度目の溜め息を吐いた。「まったく随分と強情な性格だな。とは云え人

聞らしいというか、この源世界でそこまでエゴを押し通せる奴も珍しい」

そんな感想を述べた彼女に、OLSで声が掛けられる。ジョルジュの声であった。

「クロエ。彼がそこまで言うのであれば、テストをしてみてあげてはどうかね？ 如何なる者であれ意志を尊重するのが我々のルールだ」

「局長……。そうですね、確かにこの少年からは意志を感じます。許可を頂けるのであれば資質を視るのは吝かではありませんが」

「うむ。ならば私の権限で許可しよう」

ジョルジュがそう言うと、間もなくクロエの視界に『適性試験申請受諾』の文字。

「ありがとうございます」と彼女が頭の中で呟くと、その表示が消えた。

クロエは改めてユウの顔を見据えて言った。

「少年——いやユウ・アルゲンテア。君がそこ

まで言うのであれば、よく聴け。そしてよく考えてから答えろ」

突然名前を呼ばれたユウはビクッと身を震わせつつ姿勢を正した。

「は、はい！」

「私たち規制官はアルテントロピーという力によって、情報という亜世界の設定自体を改変することが出来る。その意味が解るか？」

「設定を書き換える……？ 神様みたいにとつもない力、ということでしょうか？」

「そんな生易しいものではない。情報改変力は神が『神であるという設定』すら書き換えられるんだ。それはつまり、私たちが亜世界でアルテントロピーを使う時には、その世界の全てにおいて責任を負うということだ。私たち規制官は須らくそれを理解しなくてはならない」

（世界全部の……責任を自分が……）

その言葉はあまりに重く、ユウは思わず呑み込んだ空気に、内側から胸を圧迫されているような錯覚を覚えた。

「その上で、君がまだ私たちと同じ道を歩むと言うのなら。私は規制官として、そして一人の人間として君に問おう」

「……………はい」

「この宇宙を。世界を変える覚悟はあるか？」
心の芯まで射貫くようなクロエの強い視線を受け、ユウは無意識に唇を囁む。しかしその表情に迷いは無かった。

「……………あります」

力強く頷いた彼を見て、クロエの目には微かな光が宿る。

「いいだろう」

彼女はこめかみに指を当ててOLSを起動すると、頭の中で指示を出す。

へユウ・アルゲンテアの移送はキャンセルだ。代わりに転移装置の準備をしておけ」

*

天井は見上げる程に高い空間。白い壁面には無数の小さなレンズが全面に渡って埋め込まれており、そのレンズ達が見つめる部屋の中央に、巨大な金魚鉢の様な球体が浮かんでいた。

球の内には複雑な色彩を持った液体が充満していたが、その液体が一体何なのか、そしてまたその球体がどのような仕掛けでもって浮いているのか、ユウには皆目見当も付かなかった。

「ここが転移室だ」

クロエに連れられ、球体の前にまで歩み寄ったユウはまじまじとそれを観察する。

「——転移室？ 亜世界に転移するってことで

すか？」

「そうだ。この装置に入ると私たちの情報体は解析され、情報子として保存される。肉体は量子レベルにまで分解されるが。そして亜世界に配置されたA E O Dに情報を関連付けることで、情報体のみが亜世界へと転移する」

「よく解らないですけど、肉体が分解されるっていうのが怖いんですけど……」

まるで拷問器具でも目の当たりにしたかのよう、怯えた目付きで転移装置を眺めるユウ。

「亜世界というのは質量や時空間の概念こそあれど物理的には存在しない。つまり私たち自身も情報のみの存在にならなければ行くことはできない。そのためには私たちという系のゆらぎまで読み取る必要がある——だから溶かす」

「溶かすって……。そんな状態からどうやって元に戻るんですか？」

「装置の中に入っているのは13次元波状量子構造を持つ元素デバイスだ。これは端的に言えば、情報を転写することで何にでもなる物質だ。ようするに亜世界との次元接続が解除されれば、こいつが肉体や亜世界での記憶まで過不足なく再構成してくれる」

「？ ……それって別の身体になっちゃうってことですか？」

「そういう見方もできるがな。だがそもそも物質とは、情報が物理次元に投影されたものではない。投影元の情報が同じものなら、世界のどこでどう構成されようが同一の存在だよ。肉体の置換という意味で云うならば、新陳代謝のほうが遥かに変化が大きいしな」

「へえ」とユウがよく解らないまま気の抜けた返事をする、

「では行こうか」とクロエ。

彼女が言うと同時に、ユウが立っている床が

ゆっくりとせり上がっていく。徐々に高くなる

足元を彼が不安そうに見回しているうちに、床

は球体の天頂の高さにまで昇り、そして今度はその中心へと向けて横に伸びていった。

ユウを乗せた床が転移装置の真上にまで来ると、装置の天頂部にポツカリと穴が空く。

「高いなあ。これに入るんですよね？ 本当に大丈夫かな……」

クロエの説明をほとんど理解できなかったユウが不安げにその穴を覗いていると、

「早くしろ」とクロエが下から急かす。

「は、はい！」

彼女の言葉に押されたユウは息を呑み込んで覚悟を決めると、ままよとばかりにその穴に飛び込んでいった。

＊

深緑に囲まれた長閑な湖畔。時折小さな影が跳ね上がっては潜る水面に、雪解けの山々と赤い空があった。耳を澄ませばサワサワとさざめき揺れる草木や、何かが茂みを抜ける葉擦れの音が聴こえてくる。

ユウはそんな不穏な森の中に、前触れすら感じることもなく唐突に立っていた。

「——あれ……?」

転移装置に飛び込んだ彼は、息を止めて目を瞑り、目の前が一瞬暗転するのを感じた次の瞬間には、既にこの場所に在ったのである。

自分の肉体や精神には何の異変も感じず、両手の平や甲を回し見ても、そこには一抹の違和感すらない。ただひとつ転移前と違っていたのは、その身を包んでいた外装皮膚が無い——ど

ころか、彼は糸纏いとまとわぬ姿になっていた。

「お？　ようやく来やがったな？」

不思議そうに自身を確認しているユウに、その声を掛けたのはアマラであった。彼女の方だと云えば、源世界に在った時と同じ凛々しいスーツ姿のままである。

「うわっ!?　え、アマラさん!?　ちょ——」

ユウはしどろもどろになりながら慌てて股間を隠したが、それでは足りぬと感じたのか、その場に屈み込んでアマラに背を向けた。

「別にお前の裸なんて興味無えよ。それよりさつさと始めるぞ？」

「え、始めるって何を……」

ユウが言いかけた途端、アマラの後方で木が揺れた。と同時に巨大な影が飛び出して、腕を組んで佇立している彼女に襲い掛かった。

「ッ!?　アマラさ——!!」

鈍い金属音。ユウが叫ぶ間もなくアマラの後方には、突如として重厚な装甲板が出現していた。それが飛び掛かってきた影を弾き返したのである。

振り返りもしないアマラの横から覗き込むと、そこには体長3メートル程の不気味な生物が横たわっていた。

「うわぁ……何ですかそれ」

昆虫の様な黒い外骨格で覆われているものの、四足で後ろ脚が長く、体形だけで云うならば鳥類に近い。眼と下顎が極端に大きい顔は深海魚にも似ている。

ユウが見知っているどのモンスターとも違っており、彼としては総じて不気味と評するべき奇怪な生物であった。

「カングェベヘナかな、多分」

「死んだんですか？」

「いや気絶してるだけ」

アマラが答えている間に、彼女の後方の装甲板は風に吹かれる砂の如く霧散する。

「で。早速だけとお前にはここでテストを受けてもらうからさ？ まあ規制官になるための適性試験みたいなもんだな」

「試験ですか」とユウはさもありませんと頷く。「ああ。ここはNU101、『人無き星の世界』

って亜世界だ。今見たコイツみたいな生き物が山ほどいる。お前はこの世界で1年間、独りで生き延びるんだ」

「はあっ!？」

「1年つってもこの亜世界の時間の流れだと、源世界じゃせいぜい半日ぐらいだけだな。それに情報体は成長も老化もしねえ」

「でも僕的には1年なんですよね……?」

「うん。あ、それとテストに当たった条件が

3つある」

「条件? どんなのですか?」

「死ぬな・殺すな・壊すな。死んだら言うまでもなくそこで失格だし、襲ってくる動物を殺すとか、食べるために植物を採るのもアウト。とにかく生命に危害を加えるのはダメ、絶対。それから環境を壊すような行為も全部アウトな?」

アマラが平然と言ったのけたその条件に、言わずもがなユウの口は開いたままであった。

「……えっと、あの。それでどうやって生きていけばいいんでしょうか……?」

「そんなもん自分で考えろよ、一応試験なんだからさ。つーかこんなの規制官なら当たり前にできることだぜ?」

「当たり前になって、そんな——」

「ちなみに言っとくけど、条件破ったら即失格、2度目は無えから。まあせいぜい頑張って」

そこまで一方的に告げ終えると、アマラは笑顔で手を振りながら瞬時に消えた。

独り取り残されたユウは、寂しそうに裸で屈み込んだまま茫然と辺りを見渡す。

「……………」

木々や岩や湖は見知ったものとそれほど変わらないが、空だけは異様に赤い。当然そこから時間を窺い知ることなどできようはずもないし、そもそも1日のサイクルがどの程度の長さなのかも分からない。月や太陽は見当たらず、代わりにこのことは対照的に住み易そうな、地球に似た青い星だけが浮かんでいた。

「とりあえず——」

聞き慣れぬ奇妙な鳴き声が遠くで木霊すると、アマラを襲った怪物が倒れたままコクククククと喉を鳴らした。

「……逃げよ」

*

壁一面がガラスとなっていてある部屋に向かい、局長のジョルジュは穏やかな口調で言った。

「君に科された処置は4ヶ月の更正プログラム
の受講だ」

がらんどうのその部屋には、真ん中に男が一人、白い貫頭衣を纏った姿で立っていた。

「……………」

高い鷲鼻と眉間に深く刻まれた皺。頭は白髪交じりであるが、それほど歳がいつている様子はない。ただ黄色い瞳の奥には、老賢者の如き知性と底知れぬ凶暴さが同居しており、男が無言で佇んでいるだけで周囲の空気が張り詰めていくような、只ならぬ雰囲気があった。

「あの少年はどうした？」

——よく通る低い声。

「ユウ君かね。彼はこのWIRRAで規制官になりたいそうだ。今はそのためのテストを受けている」

「なるほど。勇者は新たな道を見つけたか。然も有りなんというところだな」

男は不思議と嬉しそうな笑みを零す。一方ガラス越しに向かい合うジョルジュは、一片の感情もその顔に映すことはなかった。

「プログラム終了後、もし望むのであれば君も同じ道を目指すことはできる。全てに応じるとは限らないが、意志を尊重するのが我々の流儀だ。それに元転移者の規制官は少なくない」

「ふむ、考えておこう」

「無理強いはしないが、色よい返事を期待しているよ、ガアラム・ギナス君」

「……妙な名になったものだ」

新たな付けられたその名前を、かつて竜であった男は自嘲気味に笑う。

「慣れたまえ。それも源世界のルールだ」

ジョルジュはそう言って手を横に一振り。するとガラスは瞬く間に白く塗り潰された。

*

ユウのテスト開始から1年後——。

湖畔の小さな岩に腰掛け、茶色い果実を一口齧るユウ。相変わらず赤いままの空を見上げる彼の顔には、変わることはない景色と違って自信と余裕が備わっていた。

また恰好も裸ではなく、かつて彼が身に付けていた剣と魔法の世界の白い鎧を着ていて、腰にも使い慣れた白銀の剣を佩いていた。

ぽつんと浮かぶ青い惑星をユウがしばらくぼ

んやりと眺めてみると、その後ろでメリメリと巨木の倒れる音がした。

「……………」

ちらりと振り返れば、木々を薙ぎ倒し現れたのはアマラを襲った例の怪物であった。しかし体長は先のものよりも何倍も大きい。

怪物は威嚇するように喉を鳴らしたが、ユウは一向に動じる様子が無い。

するとそれに腹を立てたのか、怪物はユウに猛烈な勢いで突進しながら鋭い鉤爪を振り上げ、そして容赦なく振り下ろした――が。

「????」

その攻撃は何も捉えることなく空を切り、怪物は一瞬にして姿を消したユウを探す。

「眠れ……」

彼は怪物の背後に立っていた。

指先に小さな魔法陣を灯し呪文を唱えると、

怪物は彼の存在に気付く間もなく、ダラリと力なく倒れ込んでそのまま深い眠りに落ちた。

ユウは死んだように眠る怪物を見下ろしながら果実を再び味わい、大きく伸びをしてから声を発した。

「待ちくたびれましたよ、アマラさん」

するとその台詞に、

「へえ、すっかり馴れたもんだな」と、いつの間にか彼の背後にアマラの姿。

「服っつーか鎧もちゃんと創ったんだな。まあ上出来じゃん？ 趣味はともかくさ」

「ともかくって……酷いです。苦勞したのに」
苦笑しながらユウは、腰に付けた小さな布袋から新たな茶色い果実を取り出した。

「食べます？ これ美味しいですよ」

「……お前それ、毒の実だし腐ってるぞ？」

「知ってますよ。落ちてるやつ拾ってるんで。」

でも美味しいですよ」

言葉通りの表情で果実を頬張るユウを、アマ
ラは苦虫を噛み潰したような顔で眺める。

(味覚情報に欠損でもあんのかね)

彼女の疑念はお構いなしに、ユウは最後に大
粒の種を口から吹き出すと明るい声で尋ねた。

「これで合格——ですよね？」

「ああ。まあとりあえず、ってとこだけだな？

あとは源世界に戻ってからだぜ」

アマラはそう言うのと親指を立てて無邪気な笑
顔を見せた。

*

白い部屋の真ん中には、真新しい黒いフォー
マルスーツに身を包んだユウ。局長のジョルジ
ユと対面する彼は背筋を伸ばし、緊張の面持ち

で直立している。壁際にはクロエがひっそりと
佇みその様子を見守っていた。

「それでは現時刻をもって、登録名ユウ・アル
ゲンテアを世界情報統制局所属、第三等亜世界
情報規制官に任ずる——」

ジョルジュが差し出した手にユウが握手で応
えると、彼は小さな黒縁の箱をユウに手渡した。
「これは視神経から作用する結合式元素デバイ
スだ。これを使えば、君にも我々と同じ世界が
視えるようになる」

「ありがとうございます」

「君が第一等規制官を希望していることは承知
している。険しい道程だとは思いますが頑張ってく
れたまえ」

再び固い握手をすると、ジョルジュはユウの
肩をポンと叩いてから退出を促した。

クロエと二人揃って「失礼します」と挨拶を

して統制室を抜けるユウ。真っ白な壁だけの殺風景な廊下で立ち止まり、不思議そうに元素デバイスの箱を眺める。

黒い枠に縁取られた透明な箱の中には青い液体が入っており、側面には数ミリ程度の小さなレンズ状の半球体が埋め込まれていた。一見すると目薬のように見える。

「クロエさん、これどうやって使うんですか？」
「左眼を瞑って右眼だけでレンズを見つめていろ。あとは装置が自動でやる」

その指示通りにユウがレンズを見つめていると、箱のレンズから彼の瞳に向かって、一瞬だけ青い光の筋が照射された。瞳に違和感を覚えたユウは何度か瞬きをする。

「……？ 何も起きないんですけど？」

「初回起動には指示動作が必要だ。こうやってこめかみに指を当ててみる」

クロエは人差し指と中指を揃えて、自分のこめかみに当てて見せる。ユウがそれに倣うと彼の右眼が青く光り、それと同時にその視界は驚くべき変貌を遂げた。

「わあ……」

純白と無音の廊下に色と音が拡がる——壁の上半分はガラスのように透けて、そこにずらりと部屋が並び、談話している者や手も触れずに機械を組み立てている者の姿が視える。空中には半透明の文字や案内板らしきアイコンが浮かび、頻りに色々なアナウンスが流れている。

「凄いですね、これ」

遠くで会話をしている者に焦点を合わせれば名前が表示され、壁越しにでもその話し声を聴くことができた。

そこはユウがこれまで感じていた無機質で冷たいイメージとは大分異なり、多くの人や物や

情報で溢れ返っていた。

ユウは感嘆しながら、その科学の驚異に触れてみようと何気なく壁をなぞる。すると壁が大きな窓のように開かれて、眼前には雲海から宇宙へとグラデーションに遷移してゆく、雄大壮美な外の景色が広がった。

（これが源世界——。これがクロエさんたちの視ている世界だったんだ）

美しさに息を呑む。初めて目にした源世界の光景はユウの魂を震わせた。そして感動が彼の身体を満たした後、その顔には自然と笑みが浮かんでいた。

SAMPLE

本を作ろう、本で読もう



teapot-novels.com

《 続きは書籍でお楽しみください